私学協会長賞

感動のネットワーク水

磐田市内中学校

一年　佐藤　さん

落雷で断水になってしまった。水が飲めない、手が洗えない、トイレが使えない・・・どうしよう。この時母はおちついて言った。「備ちく水があるから、コップに必要量とって使ってね。手を洗う位ならおフロの水で十分よ。」おかげで断水の間、ほとんど迷わなかった。

備える事ができていたのは、十二年前の経験からだと母は言う。東日本大しん災がおきた時、ぼくは関東にいた。まだ０歳だったぼくを育てるために、水は必須。飲み水は勿論、オムツかえ、おフロ、り乳食の調理、その食器もベビー服も授乳用品もきれいに洗って、衛生を保たねばならない。赤ちゃんを育てるためには想像以上に水が必要になってくる。今なら多少汚い手でもがまんできたり、なるべく水分せっ取をひかえようと思えるが、赤ちゃんは直接命に関わってくる。さらに赤ちゃんを育てる人の手も衛生を保つため洗わなくてはならないし、母乳を出すためには水分せっ取も必要になってくる。水がない中の育児で、母は本当に大変な思いをしたそうだ。

水道が使えるようになっても、問題は続いた。水道水から基準値をこえる放射性物質が検出されたという事で、乳児は水道水のせっ取をひかえるよう呼びかけられた。多少買いおきしていた水は、ぼくの世話ですぐ無くなってしまったという。母は地元の店を全て回ったが、水売り場は全

て空。ネットで水を探しても、売り切れだったそうだ。やっと通販で見つけたフランスの水を購入できたというが、やっと届いた水も、硬水だったので、乳児のじんぞうに負担をかけてしまう。結局ぼくには使えなかったそうだ。今あたり前に水道から出てくる水は、軟水だし、安心・安全、蛇口をひねればすぐに飲めるし使えるという、奇跡のような素晴しい環境なのだと分かった。

社会科で行政について学習したのを機に、しん災の際、行政は水に関してどんな取り組みをしたか調べてみた。例えば、厚生労働省はひ災して間もない水道水がより安全に使えるよう、各都道府県に活性炭を活用する提案などをしてくれていた。農林水産省は、大量の水が必要となる農業水利施設の用水路などを復旧してくれた。国土交通省は飲料水提供や給水車のルート確保。給水車の燃料供給は経済産業省がしてくれた。水資源機構は漏水箇所の応急復旧や、水道用水・工業用水・農業用水の取水・通水までわずか七日で完了してくれていた。文部科学省は蛇口水を一年以上も毎日測定し続け、放射性物質が基準値以下かどうか測定してくれている。環境省は、公共用水域と地下水のモニタリングを続けてくれている。他にも全ての府省庁が、協力し、尽力してくれていた事が分かった。ぼくたちに水を届けるため、これ程のネットワークが働いていた事に、ぼくは涙が出る程感動した。

調べていて、おどろいた事がある。それは水資源機構の可はん式海水淡水化装置だ。ため池の水を水道水質基準適合レベルまでじょう化し、断水地域に供給してくれていたのだ。地球上の水の九十七％は海水だし、川やため池の水を飲める水にできる装置は、災害時に関わらず今後ますます必要になると思う。この技術に感動したぼくは、ペットボトルでろ過器を作った。静岡県で配布してくれている防災マニュアルや本、ネットで調べ、試行さく誤して作成した。最初はなかなかにごりが取れなかったが、フィルターを色々な素材に変える事できれいになる事、び生物が水のじょう化に有効な事など、色々な事が分かってきた。いつも雨水をためて畑にまいたりスコップを洗うのに使ってきたが、これからはろ過水で手を洗う事に決めた。ろ過装置は災害時だけでなく、水不足などあらゆるきん急時に活やくすると思う。ぼくのろ過器はまだ手洗い位にしか使えていないが、安心して飲める位になるまで研究と改良を続けていきたい。たくさんの人に安全でおいしい水を届けるために。